

来見原のむかしむかし

はじめに

大昔から何万回の雨が降ったことでしょうか。そのたびに少しづつ山から土が運ばれ、むかしむかし来見原に住んだ人々の生活の跡を深く土中に隠していきました。そして1986年、田んぼの形を大きく整える工事が計画され、工事の前に行われた発掘調査によって、最も古いものでは約2000年ぶりにその姿を地表に現すこととなったのです。

今回の発掘調査では、土の中に穴を掘り込んで住んだ家の跡が13軒発見されたのをはじめ、^{しゅうせき}集石と呼ばれる人工的に石をいくつも集めた跡や、建物の柱穴、お墓などがいくつも発見され、また、数多くの土器や石器も出土し、かつて来見原に生きた人々の暮らしがどんなものだったのか、多くのことを知ることができました。

それでは、発掘調査結果に基づき、来見原のむかしむかしを、弥生時代中期、古墳時代中・後期、奈良・平安時代、中・近世の4つの場面に分け、それぞれ簡単に解説をしていきたいと思います。

弥生時代中期（約2000年前）

この時代より前の縄文時代には、人々は主に狩をしたり木の実を採ったり、また原始的な畑作を営んだりして生活をしていましたが、今から約2000年前、人々の生活様式を一変させるできごとが起こりました。稲作技術が伝わってきたのです。今回の発掘調査では残念ながら弥生時代の田んぼの跡を発見することはできませんでしたが、土器の中に^{いも}籾の跡がついたものがみつき、大北地方での米作りの起源が弥生時代中期であることがわかりました。ほかに、稲穂を刈ったと思われる^{いしぼうちよう}石包丁が発見されました。原始的な稲作は、まず^{ていしつち}低湿地を選んで行われたようです。おそらくこの時代の来見原には湿地帯が広がっていたのでしょう。来見原には、流水がゆるく水温が高い農具川が西側に流れており、東山から流れ出す居谷里沢もありますから、水利には事欠かなかったものと思われます。人々は土地の条件を生かし、新たに稲作を営むようになりました。農具川の周辺は弥生人に向いていたためか、大町の中でも一番弥生時代の遺跡の多いところですよ。

稲作が始まったことにより、人々の暮らしには大きな変化が生じました。人々は田を耕すことにより土地に定着するようになったのです。また、一定した食べ物を手に入れたことにより暮らしは安定するようになりました。やがて稲作が生活のほとんどを占めるようになっていきます。

弥生時代の人々は収穫した米をどのように食べていたのでしょうか。発掘調査で発見される土器にはいろいろな形のものがありますが、これらにはそれぞれ使いみちがあります。米は普通は^{かめ}甕と呼ばれる土器で炊いて食べられていたと考えられています。土器には他に、貯蔵用の^{つぼ}壺、盛りつけ用の^{たかつき}高杯などがありました。弥生時代の土器は縄文時代のそれと比べあっさりとした感じがありますが、これは技術が落ちたためではなく、実用性を重んじるようになったからです。ですから、食生活の多様化により土器の形が用途に応じて分化していったのはこの時期からとも言えるでしょう。



弥生時代人の生活想像図

(「大町市史」第2巻より)

稲の豊作を祈ることも行われていたと思われます。今回の調査では、この時代の集石が数ヶ所発見されましたが、調査区北側の集石の中や周辺からは、丹が塗られた土器、お祭りのために用いられたと思われる異形土器（普通の土器のスタイルにない形の土器）などがみつかっています。おそらく農業の祭りの場として使われたものと思われます。

このように稲作により生活は豊かで安定したものになってゆき、村は大きくなっていったと思われますが、逆に社会は複雑になってゆき、食糧や農業用水を守るための争いが始まったのもこの時期からと考えられています。縄文時代には狩りの道具として使われていた弓矢も、弥生時代以降は武器として使用され、改良が重ねられるようになります。来見原遺跡からはやじりが約90点発見されました。

今回この時代の住居跡は発見されませんでした。おそらく集落は調査区より東の高台にあったのではないかと思います。田んぼの位置をあえて予想するとしたら、調査区の南側にあたると思います。この地区の土は真っ黒で、かつて湿地であったことがうかがえます。また、この地区から出土した直線的な集石は、田んぼの畔の可能性もあると考えられます。

古墳時代中・後期（約1400～1500年前）

縄文時代に発生した集落は、弥生時代に稲作を営むことによりもっと定着した村となりました。農地が広がり村の規模も大きくなってくると、やがて村の中に指導者が、そして各地の村々を統括的に治める統治者が出現します。近畿地方では大和朝廷による国家の統一も進んでゆきました。統治者たちは自らの権力を示すために各地で大型の墓造りに奔走する時代が訪れるのですが、この時代を、その特異な墓の総称をとって古墳時代と呼びます。

大町市内にも古墳はいくつかありますが、来見原遺跡のある三日町地区は特に古墳が群をなして存在するところです。古墳を築くということは、土木機械のなかった当時、大変な労力を伴う作業でした。開墾や灌漑により農地を広げようとする村人たちの生活の中に、その労役は大きく影響したことでしょう。

村人の生活は、農業で生計をたてるという基本に変わりはないものの、衣食住の各所に変化がみられるようになります。弥生時代、稲といっしょに伝ってきた金属器は、古墳時代になると各所に使用されるように

なり、石器は衰退していきます。土器についても同様に、弥生式土器が発達し、土師器が登場し、朝鮮半島から須恵器といった固い新しい焼き物が伝わり、新しい土器が流行するようになりました。煮炊きの方法も、炉を使用していたものがカマドを築くようになっていきます。

今回の調査では、集石が数ヶ所と住居が1軒発見されました。1軒だけでは集石も古墳も築けませんから、おそらく周囲に大きな集落があったのでしょう。来見原の北側、借馬遺跡でもこの時期の住居跡がたくさん発見され、来見原村の人達と力を合わせていたと考えられます。集石からは、いくつかのお供え用の土器がみついています。村人は古墳に葬った統治者をたたえて集石を築きお祭りをしたのでしょうか。あるいは農耕の無事と豊作を祈って祭りをしたのでしょうか。いずれにせよ、古代の人々の切切たる祈りが感じられる遺構です。

奈良・平安時代（約900～1300年前）

中央では大和朝廷による天皇中心の国づくりが進み、やがて律令政治（法律に基づいた政治）が展開されるようになっていきます。地方では、国一郡一里（現在の県一郡一市町村）の継続だった整備が進められていきました。

大町市の周辺地域は、当時信濃国安曇郡村上郷に属していたものと思われます。村上郷の統治者の起原については諸説がありますが、少なくとも平安時代の後期には、伊勢神宮の荘園（私有の農地）であった仁科御厨の経営を背景に、仁科氏という地方豪族がこの地方を支配していたことがわかっています。おそらく仁科氏に通ずる豪族が以前から勢力を高めていたことでしょう。

今回、来見原で発見されたのは、この豪族に支配を受けていたであろう庶民の生活の跡です。

みなさんは、奈良・平安時代という言葉聞いてどんな暮らしぶりをイメージするのでしょうか。十二単衣を身まとった黒髪の美女でしょうか。曲水の宴や蹴鞠を催す公家たちの姿でしょうか。発掘調査に初めて立ち合った人がまぶつくりするのは、中央と地方、為政者と庶民との暮らしぶりのギャップに直面したときです。都で宴が催されている頃、ほとんどの庶民が竪穴式住居に暮らし貧しい生活を送っていた生々しい記録をまのあたりにするとき、あなたもきっと驚きの声を上げることと思います。

調査では、奈良時代の住居が1軒、平安時代後半の住居が11軒みつかりました。面白いことに、12軒中9軒もの家が火災に遇った家でした。注意深く家を探っていくと、カマドを壊してあったり、カマドの中に土器を詰め込んであったりするものがありました。つまり、この火災は不慮の事故ではなく、そこに住んでいた人々がその家に住むのをやめた後、何らかの原因で出火したものと思われます。住んでいた家を放棄しようとするとき、家に火をかけ燃やしてしまう風習があったことも考えられます。

カマドの位置も注目を集めました。市内で過去に発掘した住居のほとんどは北側か東側にカマドを築いているのに対し、今回調査した家の半数以上が南側に築いていました。これはこの地区の風向きによるものかもしれません。

住居に伴ってみつかった遺物の中には、火災のため炭化して残った木製品がありました。櫛・砧（わらをたたく木槌）・柳の曲物などがそうです。このうち櫛が庶民の家から出土する例は非常に珍しいものだそうです。平安の人々が火をつけて家を燃したおかげで知ることができた大変貴重な資料です。

他に、遺物の中には字が書かれていたり、刻まれている土器がありました。当時、庶民のほとんどは字が書けなかったと考えられています。この字を書いた人は、おそらく村の中の知識人であったのでしょうか。

多くの資料から庶民の様々な暮らしが伺うことができます。

中・近世（約500年前）

平安後期から戦国時代に武田信玄に滅されるまでの約400年間、仁科氏はこの地を治めることになります。仁科氏滅亡後、この地は深志城（のちの松本城）の勢力化に組み入れられていきます。

今回発見されたのは、仁科氏が滅亡し、深志城主小笠原氏の支配が及び始めた時期と前後する時代の、建物や柵の跡と思われる柱穴と、それに伴う遺物です。建物跡は、その柱穴の並び具合から3軒分はあるものと思われます。遺物の中には、中国から輸入された青磁・白磁^{せいじ はくじ}の茶碗、瀬戸地方で作られた陶器の茶碗や皿などがありました。

天正15年（1587年）、小笠原氏の譜代家老溝口貞秀が、同じく小笠原氏の将士とみられる浅野久右衛門尉の所領であった借馬の地を検地した史料が現在も残っています。この中に「胡桃原^{くるみはら}」、「大さゝ^{おおささ}」の地名が読み取ることができます。今回調査をした地区は大笹地籍にあたりますので、出土したこれらの遺構や遺物は、おそらくこの「大さゝ」に何かしら関係したものと考えられ、古文書史料と考古資料が一致した重要な発見といえます。